# 「日本地図を初めて作った人」

増山雄三

日本地図を初めて作った「伊能忠敬」は、出身地である千葉県香取市の佐原公園に、測量器具を片手に脚絆と草鞋姿の銅像が立っているが、二〇一八年は丁度、彼の没後二百年の節目にあたっていて、五十五才から七十二才までの間に、日本全土を測量したあと、日本地図を作る偉業をやり遂げた人物である。

伊能忠敬は、延享二年（一七四五年）、現在の千葉県九十九里の名主、小関五郎左衛門の次男として生まれ、十七才の時、香取市佐原村の酒造家だった、伊能家の婿養子となり「伊能三郎右衛門忠敬」と称し、傾きかけた酒造りを才覚で盛り返し、この地では有名な名主として知られる様になった。

が、彼は四十九才で家業を長男に譲り、単身江戸へ出て、二十才も若い師匠だった高橋

至時の弟子になり、天文学や暦学の勉強を始め様々な事を学んでいるうち、地球の大きさを求めるプロセスの中で、日本の正確な地図を描く事が必要だという結論に辿り着いた。

そこで、寛政十二年（一八〇〇年）四月、忠敬が五十五才の時、息子と弟子二人そして測量器具を運ぶ人足三人と馬二頭を連れ、自宅を発ち蝦夷へ向けて出発したが、かねてより一定の歩幅（約七十糎）で歩く訓練をし、数人が同じ場所歩いた歩数の平均値で距離を計算する方法で、毎日四十㌔を移動したというが、その脚力には驚かされる。

そして、蝦夷地滞在は百十七日に及び、帰宅後は測量データを基に三週間かけ地図を完成させ、翌年には、伊豆から太平洋北側の尻屋崎までの、東日本太平洋側の第二次測量に向かったが、その時は、一間（百八十糎）ごとに印をつけた、間縄を使う方法をとった。

この時は、八ヶ月近い期間、様々な困難と向き合いながら測量するのは、精神的にも肉

体的にもかなり過酷だったが、彼はここまでの測量から、子午線一度の距離を、二十八・二度と導き出すことに成功した。

そして翌年の第三次以降は、一～三年の間隔をあけ一八一五年の第十次まで、東北日本海側・東海北陸・近畿中国・四国・九州の前半と後半そして最後の江戸まで、十七年に及ぶ苛酷な測量を行った後、地球の大きさを求める計算を始めた。

その結果、約四万㌔という数値に辿り着いたが、それを、忠敬の師である高橋至時の持っていたオランダ天文学書の数値と照らし合わせると、双方が一致する事を確認し二人で大喜びしたが、歩いた距離は四万㌔とされ、まさに地球一周分の距離を歩いた事になる。

現在は、宇宙衛星を使った測量で地図を作るが、忠敬は五十五才を過ぎてから、それとは比べものにならない程、非常に苛酷な体験を乗越えながら測量し、冒頭に話した「日本地図を初めて作った人」として知られている

が、多くの苦難に見舞われながらの測量だったことは余り知られていないので、この国の地図をもう一度じっくり眺めてみたい。

ここに、第一次測量隊が四月に蝦夷地へ向かった時のエピソードが残るが、それは、一行が「**富岡八幡宮**」を参拝した後、浅草の暦局に立寄り挨拶し、師匠の高橋至時宅では酒を振舞われ、千住では親戚知人の見送りを受け、奥州街道を北上しながら測量を始めた。

連日、雨に見舞われた伊能忠敬率いる測量隊は、**大河原宿**（**宮城県大河原町**）を出て、仙台城下国分町（仙台市）へ向け出発した一八〇〇年六月十六日の朝は、ようやく梅雨の晴れ間がのぞいてきた。

ただ、晴れの程度が過ぎていたようで、じりじりと照りつける太陽の下、気温は三十度を超え、大河原の街を貫く奥州街道を少し歩くだけで汗が滴り落ちるので、甘いものを食べて元気を出そうと、地元の名物菓子を売る茶店に立寄り、口に入れるとふわりと溶ける

「**晒よし飴**」を食べ一息ついた。

街道は白石川沿いを抜け、船迫宿に至る道だが、忠敬はこの道のりを「船岡のたて（船岡城）と大山（韮神山）に挟まれ道も通らない」といい、街道屈指のボトルネックの一つだったが、かつての奥州合戦で、源頼朝軍はここを通過し、平泉を目指したという所だ。

今では、一九二三年に大河原町出身の実業家、高山開治郎によって寄贈された約千二百本の桜並木が、川の堤に沿い隣の柴田町へ八㌔に亘って続き、「**一目千本桜**」と呼ばれる名所になっていて、夏は深い緑の葉が繁り、木陰で一息つける場所になっている。

川を挟んで、奥州街道の対岸にある船岡城址公園の目印は、山肌に一本だけ生えるモミの木で、山本周五郎の歴史小説で、ＮＨＫ大河ドラマになった「**樅ノ木は残った**」は、この木に着想を得て執筆されたという。

江戸前期、仙台藩で起きた伊達騒動で、命を懸けて藩を守った家老の原田甲斐の生涯を

描いた物語だが、東北線をまたぐ「しばた千桜橋」から見上げると、スクッと立ったモミの姿がりりしく、作家が、城主だった甲斐の孤高の生き様と重ね合わせた事に頷ける。

それでも、この木の樹齢は百年程らしいので、忠敬が奥州路を歩いた頃はまだ無かったが、船岡城の本丸のあった標高百三十六米の頂上まで、二両編成の小型モノレールが麓と山頂を結んでいて、春は桜、梅雨時は紫陽花で、秋は曼珠沙華、冬はクリスマスのイルミネーションが綺麗で、真夏は少ないが、年間四万人の観光客が訪れるという。

ゴトゴトと音を立て、急な斜面を登ること約四分、頂上駅に着くと、木立から抜ける夏場の風が心地よく、麓での暑さが嘘の様で、眺望台に立てば、仙台平野が遠くに霞み、その先には、忠敬が歩んだ道が続いている。

また、船岡城址の裾野には、建物こそ違っているが、明治維新時から変わらない、区割りの住宅街が広がり、大手門から歩いて五分

もすると、伊達騒動で、原田甲斐と斬り結んだ柴田外記を祀る大光寺にたどりつく。

この寺は、十五世紀中ごろに開山し、一時廃絶したものを再興して、甲斐の跡を継いだ船岡城の主となった柴田家の菩提寺となったが、本堂裏のひんやりとした岩窟の中には、小ぶりの白い石で造った「五百羅漢」の石像が、ずらりと並んでいる。

それは、十八世紀後半の明和年間、この地を襲った疫病から人々を救おうと、環中道一和尚が山から石を採ってきて、お経を読みながら彫ったというが、その功徳により、流行病は治まったとされている。

大光寺によると、のちに、崩れかかった岩窟をコンクリートで補強する際、その数を数えてみたところ、実際に五百体あった事が確認され、それによって、土地に根付いた信仰の深さを知る事ができる。

令和二年六月